慶應義塾大学
保健管理センター年報

Annual Report of Keio University Health Center



2025

慶應義塾大学保健管理センター年報

Annual Report of Keio University Health Center

2025

目　　次

巻頭言……西村　知泰

Ⅰ　本編

第 1. 大学保健管理業務 …… 3
第 2. 一貫教育校保健管理業務 …… 7
第 3. 感染症対策 …… 9
第 4. 環境衛生業務 ……10
第 5. 教育 ……12
第 6. 研究 ……13
（第 7. 会議、第 8. 関連資料は資料編のみ）
第 9. 慶應義塾診療所 ……14

Ⅱ　資料編

第 1. 大学保健管理業務
1. 年間主要業務 ……15
(1) 本部（日吉）
(2) 三田分室
(3) 湘南藤沢分室（看護医療学部分室を含む）
(4) 信濃町分室
(5) 矢上分室
(6) 芝共立分室
2. 学生定期健康診断 ……21
(1) 学生定期健康診断実施項目一覧
(2) 学生定期健康診断受診状況
(3) 学生定期健康診断の流れ
(4) 学生定期健康診断　各検査の管理区分Ｃ判定集計
(5) 学生定期健康診断　生活区分、現病歴、障害者の状況
(6) 学生定期健康診断　二次検査等フォローアップ件数
(7) 学生定期健康診断　結果報告書配布数・WEB 閲覧件数
(8) 学生定期健康診断　健康診断証明書発行数
(9) ライフスタイル調査結果

3. 教職員定期生活習慣病健康診断 ……28
(1) 教職員定期生活習慣病健康診断実施項目一覧
(2) 教職員定期生活習慣病健康診断受診状況
(3) 教職員健康診断の流れ
(4) 教職員定期健康診断集計
(5) 医師面接実施状況
(6) 特定保健指導
(7) 消化器系検査
(8) 女性教職員検診
(9) 参考資料
4. その他の健康診断 ……38
(1) 雇入時の健康診断
(2) 特定業務従事者の健康診断
(3) 海外派遣労働者の健康診断
(4) 特殊健康診断
(5) 病原体・遺伝子組換え実験業務従事者の健康診断
(6) 透析施設スタッフの肝炎検査
5. 産業保健活動 ……40
6. 各種行事等救護状況 ……41
7. 女性のからだ・男性のからだ相談室利用者数 ……42
8. SOGI（性的指向・性自認）相談室利用者数 ……42
9. 教職員カウンセリング利用者数 ……42
10. 保健相談・応急処置等 ……42

第 2. 一貫教育校保健管理業務
1. 年間主要業務 ……43
(1) 幼稚舎分室
(2) 横浜初等部分室
(3) 普通部分室
(4) 中等部分室
(5) 湘南藤沢中等部分室
(6) 湘南藤沢高等部分室
(7) 高等学校分室
(8) 志木高等学校分室
(9) 女子高等学校分室
2. 保健室利用状況 ……52
(1) 幼稚舎分室
(2) 横浜初等部分室
(3) 普通部分室
(4) 中等部分室
(5) 湘南藤沢中等部・高等部分室
(6) 医療機関に依頼した外傷内訳
（幼稚舎分室・横浜初等部分室・普通部分室・中等部分室・湘南藤沢中等部分室）

(7) 精神保健相談
（幼稚舎分室・横浜初等部分室・普通部分室・中等部分室・湘南藤沢中等部分室）
(8) 高等学校分室
(9) 志木高等学校分室
(10) 女子高等学校分室
(11) 精神保健相談
（高等学校分室・志木高等学校分室・女子高等学校分室・湘南藤沢高等部分室）
(12) 保健室で対応した面接等の事例数
（高等学校分室・志木高等学校分室・女子高等学校分室）
(13) 保健室利用一覧
3. 児童・生徒定期健康診断 ……65
(1) 小学校（幼稚舎分室・横浜初等部分室）・
中学校（普通部分室・中等部分室・湘南藤沢中等部分室）
(2) 高校（高等学校分室・志木高等学校分室・女子高等学校分室・湘南藤沢高等部分室）

第 3. 感染症対策
1. 学校において予防すべき感染症、および院内感染症対応（登校・就業許可面接）……71
(1) 登校・就業許可面接数
(2) 大学および病院　大学生・教職員の感染症対策
(3) 一貫教育校　児童・生徒・教職員の感染症対策
2. 結核対応 ……73
(1) 結核スクリーニング
(2) 結核接触者健康診断
3. ワクチンで予防できる感染症対応 ……75
(1) 麻しん・流行性耳下腺炎・風しん・水痘ウイルス対応
(2) Ｂ型肝炎ウイルス対応
(3) インフルエンザウイルス対応
4. 血液曝露対応 ……79
5. 腸管感染症対応 ……79

第 4. 環境衛生業務
1. 教室等の調査 ……81
2. 食堂の調査 ……83

第 5. 教育
1. 大学講義 ……85
2. 集団保健衛生教育 ……91

第 6. 研究
1. 保健管理センター教職員研究業績 ……97
2. 保健管理センター研究会 …… 102
3. 保健管理センター研修会 …… 102

第 7. 会議
1. 保健管理センター運営委員会 …… 103
2. 業務連絡会 …… 103
3. 幹事会・執行部会 …… 104
4. 人事委員会 …… 104
5. 看護職総会 …… 105
6. 対外的活動 …… 105
7. ワーキンググループ …… 105

第 8. 関連資料
1. 慶應義塾組織図 …… 107
2. 慶應義塾大学保健管理センター規程 …… 108
3. 大学保健管理センター人事委員会内規 …… 111
4. 保健管理センター教職員一覧 …… 112
5. 保健管理センター人事 …… 113
6. 保健管理センター配置図 …… 114

第 9. 慶應義塾診療所
1. 診療所について …… 115
2. 慶應義塾診療所規程 …… 116
3. 診療所等受診者数 …… 118
4. 精神・神経科受診者数 …… 119
5. 外部医療機関依頼数 …… 119
6. 診断書、公文書発行など …… 119
7. 慶應義塾診療所管理委員会記録 …… 120

編集後記……中島　清隆

巻　頭　言

慶應義塾大学保健管理センター
所長・教授　西　村　知　泰

慶應義塾大学保健管理センターは、健康の保持増進を目的とした医学研究の実施、ならびに慶應義塾の学生・生徒・児童（塾生）および教職員の保健衛生教育・管理を担っており、その活動は多岐にわたります。2025年度の活動を振り返りますと、塾生・教職員の心身の健康維持に向けた多角的な取り組みが、着実に進展した一年であったと言えます。

塾生の健康管理においては、学生がより受診しやすいようガイダンス期間に定期健康診断（健診）を実施するなどの工夫を凝らしました。その結果､学部生の受診率は62.8％（前年度比2.9％増）と向上し、特に２年生以上の受診率に改善が見られました。新入生（学部１年生）については、コロナ禍において一時80％台まで落ち込みましたが、昨年度の92.2％に続き、今年度も92.1％という高い水準を維持することができました。また、適切な健診事後措置も実施し、健康面で塾生の学びをサポートしました。教職員の健康管理においても、健診受診率は97.0％（前年度比2.2％増）と向上しました。健診事後措置や産業医面接を徹底することで、過重労働対策やメンタルヘルスケアを含む、包括的な産業保健活動を推進しました。

感染症対策においては、学校保健安全法および感染症法に基づき、感染症に罹患した塾生・教職員への登校・就業許可面接を継続して実施しました。2025年度はインフルエンザの流行に伴い、特に一貫教育校での面接件数が2,989件（前年度比1,629件増）と著明に増加しましたが、これらを確実に遂行することで、学校内での集団感染を防ぎ、教育活動を維持することができました。あわせて、教室等の換気や温熱環境の調査・指導を行い、環境衛生の面からも教育・研究活動を支えました。

教育面では、塾生向けの講義や文化祭での衛生講習会を通じ、公衆衛生への理解を深める啓発活動に注力しました。また、研究活動においては、2025年８月に三田キャンパスにて「第63回全国大学保健管理協会 関東甲信越地方部会研究集会」を当番校として開催いたしました。多くの学校保健関係者が一堂に会し、活発な議論と意見交換が行われたことは、大きな成果となりました。

福澤諭吉先生は『学問のすすめ』の中で、「進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む」と説かれました。世の中が刻々と変化する中で、変化を恐れず、今日より明日、明日より明後日と、より良い形を模索する努力を怠れば、組織は自ずと衰退してしまいます。義塾における教育・研究の多様化、産業保健・学校保健関連の法改正に伴い、保健管理センターへのニーズは今後さらに高まることが予想されます。保健管理センターはこれからも、関係者の皆様と密に連携し、対話を重ねながら業務の充実、改善、効率化を図ってまいります。引き続きのご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Ⅰ　本編

第 1.　大学保健管理業務
第 2.　一貫教育校保健管理業務
第 3.　感染症対策
第 4.　環境衛生業務
第 5.　教育
第 6.　研究
（第 7.　会議、第 8.　関連資料は資料編のみ）
第 9.　慶應義塾診療所

第１．大学保健管理業務

1．学生定期健康診断

(1) 実施項目

資料編 2-(1)に本年度の学生定期健康診断にて実施した検査項目の一覧を掲載した。学校保健安全法施行規則第６条第１項にある検査項目、および第４項にある除外項目を照らし合わせ、法定項目を満たして実施している。また、血圧測定を全員に実施し、若年期からの生活習慣病予防および早期発見に努めている。

(2) 受診状況

学部生の対象者数29,058人、受診者18,242人（受診率62.8%、男子60.2%、女子67.3%）であり、昨年(受診率59.9%)と比較して増加した。医学部、薬学部、看護医療学部の医療系学部では、各々99.1%、94.0%、98.2%と高い受診率を維持した。大学院修士課程生、大学院博士課程生、専門職学位課程生の受診率は、66.9%(昨年：67.7%)、63.1%(60.3%)、58.7%(45.1%)であり、昨年度と比較して増加した。

(3) 事後措置のまとめ

本健診後には必要に応じ、再検査、精密検査、医師面接、外部医療機関紹介などを行う。各検査項目における管理区分C判定(異常所見あり)の割合は概ね同等だった。血圧については再検査を必要とする件数は昨年度より増加したが受診者数増加による影響もあると考えられる。また、生活区分、現病歴、障害の観点から何らかの配慮が必要と判断された者の割合についても例年とおおむね同等であった。

(4) 結果報告書配布数・WEB閲覧件数

本健診結果返却は本センター各地区の窓口返却とスマートフォンでもアクセス可能なWEB閲覧の方法がある。WEB閲覧を開始した2007年度以降、窓口返却は減少し、本年度は昨年度に続いて0件であった。WEB閲覧は13,423件（昨年度：10,328件）であり、年々増加している傾向が見られた。

(5) 健康診断証明書発行数

全キャンパスにおける保健管理センターの窓口発行は 56 枚、学内印刷・コンビニエンスストア発行・オンライン送付は1,018件であり、昨年度同様に窓口発行のほうが少なかった。

(6) ライフスタイル調査結果

学生の飲酒や喫煙習慣、睡眠や食事などライフスタイルに関するWEB問診の結果は昨年から特段の変化はなかった。

新型コロナウイルス感染症流行で健診受診率は大幅に減少し、その後も減少傾向が続いていたが、本年度は増加の兆しがみられた。また、健康診断結果の閲覧率についても61.8%と、昨年度49.9%と比較して増加した。しかしながら、依然として健康診断受診率および結果閲覧率の低い状況はかわらず、引き続き自身の健康への関心度を高める対策が必要である。

（武田彩乃）

2. 教職員定期生活習慣病健康診断

(1) 受診状況

2025 年度の慶應義塾全体の受診率は 97.0%であり、2024 年度（94.8%）に比べ 2.2%上昇した。地区別受診率は日吉地区が 95.5%、三田地区が 93.9%、湘南藤沢地区が 94.5%、信濃町地区が 99.1%、矢上地区が94.5%、芝共立地区95.8%、志木地区が100.0%であった。一貫教育校所属教職員の受診率は99.8%と 2024 年度と比べ一部地区の受診率が大きく上昇した。就業制限指示者は全地区で 4 名であった。

(2) 生活習慣病健康診断集計

身長・体重、腹囲、視力、聴力、胸部 X 線検査、血圧、検尿、心電図、心音の有所見者の割合は 2024 年度と大きな変化はなかった。その内、視力の C 判定（右または左の視力が 0.7 未満）が 12.2%と 2025 年度も 10%を超えていた。一方、2020 年度は 10%を超えていた、血圧の C 判定（収縮期血圧 140mmHg 以上かつ/または拡張期血圧 90mmHg 以上）は、2025 年度は 9.5%と微増したが、2021 年度以降 10%未満を維持している。

血液検査の有所見者の割合は2024年度と大きな変化はなく、血液検査で異常値が認められる割合が高い検査は脂質関係、肝臓関係、腎臓関係であった。TG 300mg/dL 以上、または HDL コレステロール 34mg/dL 以下、または LDL コレステロール 160mg/dL 以上が脂質関係の C 判定となるが、男性で 13.8%、女性で 8.9%、合計で 11.1%であった。TB 2.5U/L 以上、または AST 60U/L 以上、または ALT 60U/L 以上、または ALP 136U/L 以上、またはγ-GTP 160U/L 以上（男性）、90U/L 以上（女性）が肝臓関係の C 判定となるが、男性で 7.9%、女性で 3.3%、合計で 5.4%であった。eGFR が 59.9mL/min 以下が腎臓関連の C 判定となるが、男性で 8.6%、女性で 6.3%、合計で 7.3%であった。これら C 判定の割合の合計は 2024 年度に比べ、肝臓関係、脂質関係、腎臓関係で微増した。

(3) 特定健康診査

40 歳以上 65 歳未満の受診者は 3,704 人（男性 1,777 人、女性 1,927 人）であった。40 歳以上 65 歳未満のメタボリックシンドロームと診断された人は、男性で 234 人（13.2%）、女性で 51 人（2.6%）、合計で 285 人（7.7%）であった。積極的支援レベルが男性で 129 人（7.3%）、女性で 34 人（1.8%）、合計で 163 人（4.4%）であった。動機付け支援レベルが男性で 212 人（11.9%）、女性で 96 人（5.0%）、合計で 308 人（8.3%）であった。

保健管理センターにおける 2025 年度の特定保健指導の初回指導は 81 件実施され、2024 年度（117 件）に比べて減少した。

(4) その他

定期健康診断後の管理状況は、面接指示者 1,187 人に対し、面接を実施した件数は 754 人であった。年齢40歳以上の健保加入者は消化器系検査の受検資格があり、希望者は上部消化管検査、腹部超音波検査を受検した。年齢35歳以上の健保加入者は大腸がんスクリーニング（便潜血検査）の受検資格があり、希望者が受検した。

（中村真理）

3．その他の活動等

(1) その他の健康診断

2025 年度は、常時深夜業に従事する者等を対象とする特定業務従事者の健康診断を信濃町地区で 2,081 件実施した。また、電離放射線取扱い者、特定化学物質取扱い者、有機溶剤取扱い者、鉛取扱い者を対象とする特殊健康診断、病原体・遺伝子組み換え実験業務従事者を対象とする健康診断も実施した。電離放射線取扱い者の健康診断の件数は、教職員を中心に信濃町地区で多く、病原体・遺伝子組み換え実験業務従事者の健康診断の件数は、学生を中心に矢上地区、教職員を中心に信濃町地区で多かった。特定化学物質取扱い者、有機溶剤取扱い者の健康診断の件数は、学生を中心に矢上地区で多かった。2024 年度より血液浄化・透析センタースタッフに対し「透析施設における標準的な透析操作と感染予防に関するガイドライン」（六訂版）に準じて、ウイルス肝炎について定期的な検査実施を開始し、2025 年度の事後措置対象者は 1 件であった。昨年度（0 件）と比較して増加した。

(2) 産業保健活動

産業医面接（労働安全衛生規則第 14 条）は職場の上長や本人からの申し出があった場合と、長時間労働を行った教職員に対して行っている。具体的には、内科疾患または精神科疾患による休職後復職者、過重労働者、メンタル不調者等を対象に実施し、必要に応じて、総括安全衛生管理者に対して勧告し、又は衛生管理者に対して指導し、もしくは助言を行っている。

労働者の心の健康保持（労働安全衛生法第 66 条）については職業性ストレス簡易調査票（57 項目）によるストレスチェックを実施し、教職員の心の健康保持を図っている。

2024 年 4 月より、医師の働き方改革において長時間労働の医師の労働時間短縮及び健康確保のための措置の整備等の一環として、当該月に 100 時間以上の時間外・休日労働が見込まれる信濃町地区の医師に対し長時間労働者面接を開始した。2025 年度は 180 件であり、昨年度（160 件）と比較して増加した。

(3) 各種行事等の救護状況

保健管理センターでは、各種行事（入学式、卒業式、入学試験等）の救護活動を行っている。2025 年度の救護件数としては、大学学部一般選抜試験が一番多く、70 件（日吉本部 52 件、三田分室 18 件）であった。

(4) 女性のからだ・男性のからだ相談室、SOGI（性的指向・性自認）相談室

協生環境推進室との共同事業とし、教職員・学生を対象に、2022 年 1 月より女性のからだ・男性のからだに関する健康相談を、2023 年 7 月より SOGI（性的指向・性自認）相談を開始した。からだ相談は慶應義塾大学病院の産婦人科医師・乳腺外科医師・泌尿器科医師が担当し、SOGI 相談は慶應義塾大学病院の精神神経科医師・形成外科医師が担当している。2025 年 4 月から 2026 年 3 月までの女性のからだ・男性のからだ相談室利用者数は合計 15 件、2025 年 4 月から 2026 年 3 月までの SOGI 相談室利用者数は合計 2 件であった。

(5) 教職員カウンセリング

教職員健保加入者（信濃町地区を除く）を対象とした教職員カウンセリングは、2025年4月から2026

年 3 月までの利用者数は合計 66 件であり、昨年度（54 件）と比較して増加した。

(6) その他の活動

2024年度に続いて、新型コロナウイルス感染症の流行以降減少していた教職員・学生の登校機会が増加した。そのため、2025年度は、投薬（市販薬）は26件、処置（外傷の消毒、湿布等の処置、爪きり使用、検温等）は578件であり、2024年度（投薬28件、処置612件）と比較して投薬、処置件数ともに減少した。ベッド休養は445件で、2024年度（530件）と比較して減少した。保健相談等（受付窓口や電話での相談、投薬・処置・ベッド休養が生じない健康相談、保健指導、病院案内等）は275件で、2024 年度（383 件）と比較して減少した。

（中村真理）

第２．一貫教育校保健管理業務

１．小・中学校

(1) 2025 年度定期健康診断のまとめ

ア．男子保健統計調査

全国平均値（2025 年度）と比較し、身長は概ね同等～高く、体重は小学校において概ね少なかった（中学校では一定の傾向なし）。肥満傾向（肥満度＋20%以上）の割合（幼稚舎 2.5%、横浜初等部 1.3%、普通部 7.3%、中等部 7.7%、湘南藤沢中等部 6.7%）は全国平均値（小学校 9.5%、中学校 11.3%）より少なく、栄養不良（やせ傾向：肥満度－20%以下）の割合（幼稚舎 2.3%、横浜初等部 1.0%、普通部 3.8%、中等部 2.6%、湘南藤沢中等部 3.2%）は全国平均値（小学校 1.7%、中学校 3.1%）とほぼ同等であった。裸眼視力 1.0 未満の割合は、小学校では少なく、中学校では同等～多く、未処置う歯の保有率は大幅に少なかった。全体の傾向としては、概ね例年通りであった。

イ．女子保健統計調査

全国平均値（2025 年度）と比較し、身長は概ね同等～高く、体重は概ね同等～少なかった。肥満傾向の割合（幼稚舎 1.0%、横浜初等部 0.8%、中等部 1.4%、湘南藤沢中等部 3.7%）は全国平均値（小学校 7.9%、中学校 8.6%）より少なく、栄養不良（やせ傾向）の割合（幼稚舎 1.4%、横浜初等部 2.1%、中等部 2.5%、湘南藤沢中等部 5.4%）は全国平均値（小学校 1.7%、中学校 3.9%）とほぼ同等であった。裸眼視力 1.0 未満の割合、および未処置う歯の保有率の傾向は、男子における傾向と同様であった。全体の傾向としては、概ね例年通りであった。

ウ．結核検診

計 29 人を対象に精密検査（胸部Ｘ線検査）を実施した。受検理由の内訳は、BCG 未接種（19 人）、結核高蔓延国での居住歴（11 人）であった（重複 1 人あり）。最終結果は全員異常なしであった。

エ．血液検査結果

小学 4 年生（2023 年度～対象学年を変更して再開）、中学 1 年生を対象に実施した。LDL コレステロール高値などの割合は概ね例年通りであった。ウイルス抗体価検査の陰性者は、例年通り、流行性耳下腺炎抗体、および水痘ウイルス抗体で多かった。

(2) 2025 年度保健室利用状況、他

年間来室者数は、小学校では幼稚舎 5,280 人、横浜初等部 4,488 人、中学校では各校 1,200～1,300 人程度で、小学校では昨年度と比較して減少した（中学校では一定の傾向なし）。ただし、この人数は児童・生徒が自発的に来室した人数であり、その他、健康診断や定期的な身体計測後などに関連する面接などはカウントされていないため、実際にはもっと多くの来室者がいることになる。

インフルエンザなどに関連した学級閉鎖の実施は、幼稚舎で 32 件、横浜初等部で 11 件、普通部で 29 件（学年閉鎖 1 件）、中等部で 17 件、湘南藤沢中等部で 11 件（学年閉鎖 2 件）であり、昨年度と比較して大幅に増加した。

精神保健相談の相談述べ件数は、昨年度と比較して、小学校で減少、中学校では同等～増加した。

（井ノ口美香子）

2．高校

(1) 2025 年度定期健康診断のまとめ

ア．保健統計調査

2025 年度の学校保健統計調査（全国）の結果と比較した。身長は、男子女子ともに、全ての高校・学年において、全国平均値と比較し高かった。体重は、高等学校および志木高の全学年、湘南藤沢高等部男子2 年生、女子高等学校の 3 年生および湘南藤沢高等部女子 2 年生で全国平均を上回っていた。肥満傾向にあるものについては、男女ともに全国平均を下回り、やせ傾向にあるものは男女ともに全国平均を上回っていた。全体の傾向としては概ね例年通りであった。

イ．生徒定期健康診断受診・管理状況

各高校の受診率はほぼ 100％であった。全校において血液検査の実施を含め例年通り実施した。再検査対象者の割合は、検尿については高等学校および女子高等学校が昨年度と比較して増加していたが、血圧については湘南藤沢高等部男子の血圧が昨年度と比較して増加した以外は、昨年度と比べ各校減少し、女子高等学校及び湘南藤沢高等部女子では該当者なしであった。

ウ．血液検査結果

2024年度と比較し、異常値を認めた生徒の比率はLDLコレステロール高値については、高等学校、志木高等学校、および湘南藤沢高等部女子において、HDL コレステロール低値については、高等学校および志木高等学校において、尿酸値高値については志木高等学校および湘南藤沢高等部男子において、クレアチニン高値については高等学校および女子高等学校において、いずれも増加していた。Hb 低値については女子高等学校および湘南藤沢高等部女子のいずれにおいても減少していた。

(2) 2025 年度保健室利用状況

保健室利用状況は、高等学校および湘南藤沢高等部は昨年度に比べ変わらず、志木高等学校では増加し、女子高等学校では減少していた。生徒数の多い高等学校が年間来室者数 1,735 人、一日あたりの平均来室者数 11.8 人で 4 校中一番多かったが、一人あたりの平均年間来室回数は 0.8 回で、志木高と同じく一番少なかった。

インフルエンザ等に関連する学級閉鎖の実施は、高等学校で 11 月～2 月に 8 件、志木高等学校で 10 月～11 月に 5 件、女子高で 11 月および 2 月に 5 件、湘南藤沢高等部で 12 件（学年閉鎖 2 件）であった。

精神保健相談に関しては、前年度と比較して、女子高等学校がわずかに減った以外、全ての高校において事例数および延べ件数いずれも増加した。相談内容で一番多いものは、志木高等学校では例年通り学校生活・友人関係で、湘南藤沢高等部では、学校生活・友人関係と、性格・生きがいが同数であった。その他の高校では、性格・生きがいであった。

保健室で対応した面接等の事例に関してはインフルエンザ罹患者の増加に伴い昨年度と比べ、すべての高校で登校許可面接が増加していた。生徒との面接事例は、登校許可面接や身体計測が大半を占めた。教職員との面接事例では、生徒や学校運営に関する相談が多かった。

（後藤伸子）

第３．感染症対策

1．学校において予防すべき感染症、および院内感染症対応

学校保健安全法、および感染症法で規定された感染症に罹患した塾生・教職員を対象に、登校・就業許可の面接を実施した。大学および大学病院の学生・教職員の面接数は 1,646 件、一貫教育校の児童・生徒・教職員の面接件数は 2,989 件であった。感染症別の大学および大学病院の学生・教職員の面接件数はインフルエンザが最も多く、1,180 件、次に新型コロナウイルス感染症が多く、371 件であった。感染症別の一貫教育校の児童・生徒・教職員の面接件数では、インフルエンザが最も多く、2,673 件、次に新型コロナウイルス感染症が多く、189 件であった。

2．結核対応

信濃町地区の新規採用者・異動者、医療系学部生・大学院生の新入生・編入生・転科生を対象に、結核スクリーニングとしてインターフェロンγ遊離試験を 984 件実施した。感染性の高い結核患者との接触者に実施される結核接触者健康診断は新規が 4 件あり、過去からの継続は 0 件であった。全て信濃町地区で実施され、結核感染者および発病者は発生しなかった。

3．ワクチンで予防できる感染症対応

麻しん、流行性耳下腺炎、風しん、水痘のワクチン接種を、信濃町分室で教職員・大学院生・医療系学部生を対象に延べ 66 人に実施した。日吉本部、三田分室、湘南藤沢分室でも医療系学部生・医療系大学院生・教職課程生の希望者を対象に、麻しん、流行性耳下腺炎、風しん、水痘のワクチン接種を実施しており、2025 年度は日吉本部で延べ 93 人、湘南藤沢分室で延べ 16 人に接種した。三田分室は接種者 0 人であった。ワクチン接種数の内訳は、流行性耳下腺炎ワクチンが 92 人、水痘ワクチンが 81 人、麻しん・風しん混合ワクチンが 42 人、風しんワクチンが 16 人であった。

一貫教育校の小学生・中学生、一部の高校生を対象に、麻しん、流行性耳下腺炎、風しん、水痘の抗体価検査を実施し、免疫が感染防御に不十分と判断された者には、原則、ワクチン接種を推奨した。

例年通り、医療系学部生・大学院生・教職員の予防接種として B 型肝炎ワクチン接種を実施した。延べ 900 人に接種した。医療従事者を対象に信濃町地区で、インフルエンザワクチン接種を 3,555 人に実施した。

4．血液曝露対応

慶應義塾大学病院での血液汚染事故の発生に際しては、リスク判断に基づいて対象者と協議し、必要な措置を講じた。曝露報告者数は延べ 86 人であった。HIV 対策として抗 HIV 薬の曝露後予防内服を合計 8 件に実施したが、B 型肝炎対策としての抗 HBs 人免疫グロブリン曝露後投与は 0 件であった。

5．腸管感染症対応

看護医療学部実習予定者 121 人を対象に便培養検査を実施した。検査対象菌種（赤痢菌、腸管出血性大腸菌 O-157、コレラ菌、サルモネラ属等）に関しては全員陰性だった。

（西村知泰）

第４．環境衛生業務

学校における環境衛生管理については、学校保健安全法（2009年４月１日施行）の規定に基づき、「学校環境衛生基準」が定められている。施行後５年を経過し、環境衛生に関する新たな知見や児童生徒等の学校環境の変化を踏まえて検討が行われ、一部改正された（2024年４月１日施行）。これらの基準に基づいて、キャンパス衛生管理者、保健管理センター医師および保健師が校内巡視および環境測定を行った。

1. 教室等の調査

⑴ 実施項目

ア 換気及び保温等および空気清浄度

（ア）換気
（イ）湿度
（ウ）相対湿度
（エ）浮遊粉じん
（オ）気流
（カ）一酸化炭素
（キ）二酸化炭素
（ク）揮発性有機化合物※1
ホルムアルデヒド、トルエン、キシレン、
パラジクロロベンゼン、エチルベンゼン、
スチレン
（ケ）ダニまたはダニアレルゲン※2

イ 採光

（ア）照度
（イ）まぶしさ

ウ 騒音

（ア）騒音レベル

エ 校内巡視

※1 2006 年度より管財部から業務移行された。
※2 2010 年度より実施

⑵ 実施日程（大学・一貫教育校の各「年間主要業務」の頁を参照）

前期 5～8 月、後期 10～1 月に実施（年 2 回）した。

⑶ 結果・事後措置概要

ア 温熱環境

季節により、温度や湿度が基準値を超えるまたは基準値を下回る教室が散見された。教室使用時には空調設備や換気扇、加湿器を適切に使用し、教室内の環境を保つよう指導した。

イ 換気・空気清浄度

二酸化炭素濃度が基準値内高値または基準値を上回る教室があるため、定期的に換気扇を稼働させる、授業前後に窓や出入口のドアを開放するように指導した。浮遊粉じんが基準値を超える教室があるため、定期的に清掃、換気を行うよう指導した。

ウ 照度・まぶしさ

照度が基準値を下回っていた教室があったが、映像授業で一部照明を消灯していたためと判断した。

エ　騒音

一部の教室において基準値を上回る教室があった。しかし、換気のため一時的に窓を開放する観点からやむを得ない状況と判断し、授業中は窓を閉じ遮音するように指導した。

オ　ダニまたはダニアレルゲン

問題はなかった。

カ　揮発性有機化合物

一部の教室でホルムアルデヒドが基準値を超えて検出された。換気を行うよう指導した。

キ　その他

教室や廊下にゴミや私物の散乱が認められたため、教室環境の美化および整理整頓に努め、緊急時避難経路確保を行うよう指導した。

2. 食堂の調査

学校保健安全法に基づいて、食堂環境衛生検査ならびに食堂微生物検査を行い、関係所属長へ報告と改善依頼を行うとともに、食堂管理責任者へ指導を行った。

(1) 実施項目

ア　厨房巡視・聞き取り調査

キャンパス衛生管理者、保健管理センター医師および保健師が担当地区の食堂を巡視し、食堂施設の状況、設備およびその取扱い状況、食品の取り扱いを含む調理場内の衛生状況、従事者の衛生管理状況、検食の状況等を調査した。

調理場換気扇の錆や油汚れ、設備の破損が認められた地区があり、定期的な清掃と速やかな修繕を指導した。調理場内の室温が高い地区については、作業者の熱中症や細菌・ウイルス繁殖の原因になることから、空調設備の充実や網戸付き窓の開放により気流を高め空気環境の管理に努めるよう指導した。また、一部の施設では水場周囲の床が濡れており、作業者の転倒の危険性もあることから定期的な清掃を指導した。食品等の期限表示管理の徹底を指導した。

イ　微生物検査

冷蔵庫、まな板、作業者手指、台ふきん、直接喫食食品、飲料水、空中落下菌等（一般細菌、大腸菌、黄色ブドウ球菌、大腸菌群の培養検査）の検査を行った。

（ア）ふき取り検査で複数の食堂施設から一般細菌、一部の施設から大腸菌や大腸菌群が検出された。汚染された手指から食材への二次汚染の可能性がある為、手洗い方法を見直して、手指の清潔保持や勤務前の傷の有無と状況確認の徹底に努めるよう指導した。

（イ）台ふきん、まな板では複数の食堂施設で一般細菌、一部で大腸菌が検出された。台ふきんの頻回の交換と消毒、ふきんの使途の明確な区別を徹底する必要について指導した。

（ウ）加熱した食品から一般細菌が検出された施設があり、清潔保持の徹底を指導した。

（エ）一部の施設で空中落下菌、真菌を認めた。換気などの影響も考えられるが、引き続き空調設備の清掃・点検や24時間換気し、空気環境の管理の励行を指導した。

（中村真理）

第５．教育

1．大学講義

保健管理センター設置講座では、非医療系学部の学生を対象として生活習慣病、感染症、飲酒の問題、メンタルの問題等、現代社会と深く関わりのある代表的な疾病について、保健管理センターの各専門医がオムニバス形式の講義を行っている。将来、ヘルスケア関連企業に就職する学生の入門講義になるばかりでなく、健康的な生活を理解し、実践するための保健教育を目的としている。

また、体育研究所設置講座、医学部講座、看護医療学部講座、薬学部講座、学生総合センター設置科目、大学院健康マネジメント研究科においても講義を行い、通信教育課程についてはテキスト科目のレポート添削、科目試験のほか、夏期スクーリングも担当している。

2．集団保健衛生教育

(1) 衛生講習会

一貫教育校及び大学における文化祭、イベント等で、食品を扱う模擬店を出店する際には、保健管理センターが細菌性食中毒予防のため、①食中毒について②食材の取扱い方③手洗いの方法④速乾性擦式手指消毒薬およびアルコール含有ウェットティッシュの使用方法等について指導を行っている。また、酒類を提供する予定のある大学生に対しては飲酒についての注意喚起も行っている。

(2) BLS（一次救命処置；Basic Life Support）講習会、AED(自動対外式除細動器；Automated External Defibrillator)講習会

慶應義塾に所属している学生、教職員および委託職員に対して救急蘇生法とAEDの使用法についての説明、指導を行っている。2025年度は本部（日吉）にて3回、三田分室にて6回、湘南藤沢分室にて15回、矢上分室にて1回、芝共立分室にて2回実施した（受講人数合計約210人）。

(3) 一貫教育校におけるセミナー・保護者向け講演会

小児・若年者の肥満、高血圧などの生活習慣病は高率に成人の生活習慣病に移行することが知られている。そのため小児・若年者の生活習慣の修正は重要であり、一貫教育校では生活習慣是正のためのセミナーを行っている。また、生徒・保護者・教員を対象に脳震盪・精巣捻転症・熱中症・インフルエンザ等の感染症・心の問題・スポーツ障害等に関しての講演会も行っている。

(4) 一貫教育校における授業

一貫教育小中学校における特別授業に加え、2023年度より湘南藤沢高等部において保健の通年授業を担当している。

（牧野伸司）

第６．研究

保健管理センターは、慶應義塾の研究所附属機関に位置づけられ、大学・大学院生、小中高一貫教育校児童・生徒、教職員の健康管理および感染症等の管理業務に加えて、健康の保持増進のための教育や研究活動を担当している。

1．保健管理センター教職員研究業績

(1) 受賞

2025 年度は該当者なしであった。

(2) 著書・翻訳書・論文・学会発表

2025 年度に保健管理センター教職員が執筆した著書は9編、筆頭著者で発表した論文は英文誌5編、和文誌 16 編であった。保健管理センターの機関誌である「慶應保健研究　第 43 巻第 1 号」(2025 年 8 月 30 日発行）には、学校保健や健康管理等に関する原著論文 6 編、総説 3 編、解説 2 編が掲載された。2025 年度に保健管理センター教職員が筆頭演者となった学会発表は、国際学会なし、国内学会 24 題であった。主な学会として、第 63 回全国大学保健管理研究集会（2025 年 9 月、会場・WEB 開催）では、一般演題 1 題、第 71 回日本学校保健学会学術大会（2025 年 11 月、会場開催）では、一般演題 2 題が発表された。

2．保健管理センター研究会

2025 年度は 8 回開催した。保健管理センター教職員による研究発表、第 63 回全国大学保健管理研究集会および第 71 回日本学校保健学会学術大会の予演会などを WEB 開催した（第 8 回のみ、三田キャンパス会議室で開催)。

3．保健管理センター研修会

2025 年度は実施しなかった。

（井ノ口美香子）

（第７．会議、第８．関連資料は資料編のみ）

第９．慶應義塾診療所

2025年度の人事については、4月1日付で湘南藤沢診療所長が横山裕一医師から後藤伸子医師に、日吉診療所副所長が森正明医師から小杉将太郎医師にそれぞれ交代した。また、三田地区診療所の薬剤師が、11月1日付で西木美優薬剤師から東本理那薬剤師に交代した。

日吉・三田・湘南藤沢・矢上の4診療所における受診者数は、合計2,556件（学生1,238件、教職員1,314件、その他4件）であった。前年度と比較して426件の減少となり、内訳は学生が237件減、教職員が189件減であった。内科診療については、全体として約14%減少した。

精神科については、矢上診療所を除く3診療所で診療を行っており、受診者数の合計は835件（学生703件、教職員132件、その他0件）であった。前年より90件（1割以上）減少したが、これは非常勤医師の枠が削減され、受診枠が減少したことが主な要因である。

（中島清隆）

Ⅱ　資料編　　第６．研究

1. 保健管理センター教職員研究業績
2. 保健管理センター研究会
3. 保健管理センター研修会

1. 保健管理センター教職員研究業績

(1) 受賞

該当者なし

(2) 著書・翻訳書・論文・学会発表

ア 著書

1)片山奈理子，他：第二章　反すうの科学.「反すう」に気づいてぐるぐる思考から抜け出そう！認知行動療法に基づくセルフケアブック. 岩崎学術出版社，31-39，2025

2)片山奈理子，他：精神療法の進め方：簡易精神療法、心理職との連携など. 研修医のための精神科ハンドブック第2版. 医学書院，36－38，2025

3)片山奈理子，他：第10章ホームワークのセラピーへの統合. うつ病の認知療法 第2版. 岩崎学術出版社，225-241，2025

4)木下眞里，他：NICUに入院している新生児の痛みのケアガイドライン第3版.Mindsガイドラインライブラリ，2025

5)後藤伸子，他：Q18.痩せるために食事に気をつけなさいと言われました。どのようなことに気をつければよいですか？. 患者にこう聞かれたら 疑問に答える肥満症診療. 日本医事新報社，108-113，2025

6)小林佐紀子，他：無理せず，比べず，純粋に好きなことを！. 医師としての幸せな人生のために大切なこと-糖尿病・内分泌内科医師からのメッセージ. 診断と治療社，248，2026

7)佐渡充洋，他：総論8 精神科治療学 1.精神療法. 日本精神神経学会 精神科専門医テキスト. 株式会社新興医学出版社，177-189，2025

8)佐渡充洋：さらに深めるマインドフルネス 安らぎへと導かれる新たな8週間のプログラム. 創元社，2025

9)康井洋介：呼吸器ウイルス感染症の学校での感染対策. インフルエンザ／新型コロナウイルス感染症診療ガイド2025-26. 日本医事新報社，190-196，2025

イ 論文

1)Higuchi R, Katayama N, et al.：Improvement in avoidance in major depressive disorder: a 10-month prospective study of depressive symptoms and personality traits. Psychiatry Clin. Neurosci. Rep.，05: e70288，2026

2)Hirano A, Yoshiba S, at al.：Inportance of Preoperative Left Ventricular Volume Assesment in Asymptomatic Tetrarogy of Fallot infants. Ann Thorac Cardiovasc Surg, 31(Iss.1)：1-9，2025

3)Hirano Y, Inokuchi M, et al.：Reference values of arm span and arm span to height ratio of Japanese population in childhood and adolescence：Comparison with Dutch and Turkish population. Am J Hum Biol, 37(4)：e70051，2025

4)Ishikawa K, et al. ： From Mice to Humans: Divergent Strategies for Intestinal Homeostasis and Regeneration. FEBS Lett, in press，2026

5)Jayaweera S，Nishimura T，et al.：Investigation of WQ-3810, a Fluoroquinolone with a High Potential Against Fluoroquinolone-Resistant Mycobacterium avium. Antibiotics (Basel)，14(7)：doi: 10.3390/antibiotics14070704. 2025

6)Katayama N, et al.：Dynamic neural network modulation associated with rumination in major depressive disorder: a prospective observational comparative analysis of cognitive behavioral therapy and pharmacotherapy. Transl. Psychiatry, 6, 15：

267, 2025
7)Kosugi S, et al.：Vascular Endothelial NAMPT-Mediated NAD+ Biosynthesis Regulates Angiogenesis and Cardiometabolic Functions in Male Mice. Aging Cell, 24(11)：e70222, 2025
8)Koreki A, Sado M, et al.：Exploring factors associated with inflammation in stressed workers: a cross-sectional study. BMC Public Health, 25(1)：3937, 2025
9)Matsunaga S, Sado M, et al.：Longitudinal association of nonrestorative sleep with subjective health and work performance: a cohort study in the Japanese construction industry. Ind Health, https://doi.org/10.2486/indhealth.2025-0204, 2026
10)Matsunaga S, Sado M, et al.：Association between nonrestorative sleep and increased healthcare costs: A 6-year cohort study. Sleep Biol Rhythms, in press, 2026
11)Misawa K, Nishimura T, et al.：Combined dual β-lactams and diazabicyclooctane β-lactamase inhibitor is highly effective against Mycobacterium abscessus species in vitro. J Glob Antimicrob Resist, 42:142-150, 2025
12)Nagao G, Nishimura T, et al.：Clinical characteristics of pulmonary non-tuberculous mycobacterial disease with CFTR variants in the Japanese population. BMJ Open Respir Res, 13(1):doi: 10.1136/bmjresp-2025-003683. 2025
13)Noda S, Katayama N, et al.：Association of Personality Traits with Rumination Improvement Following Cognitive Behavioral Therapy in Major Depression : An Observational Study. Front Psychiatry, 16：1671393, 2026
14)Park K, Nishimura T, et al.：Novel Genetic Loci for Nontuberculous Mycobacterial Pulmonary Disease and Potential Protective Effect of Body Mass Index. Am J Respir Crit Care Med, 211(11)：2191-2202, 2025
15)Sado M, et al.：Scoring System for the Japanese Version of the ICECAP-A. Psychol Res Behav Manag, 18: 703-717, 2025
16)Shinagawa K, Katayama N, et al.：Hierarchical brain dynamics associated with remission from major depression Across diverse therapeutic modalities . Biol Psychiatry Cogn Neurosci Neuroimaging, S2451-9022(26)：00001-7, 2026
17)Sonehara K, Nishimura T. et al.：Germline variants and mosaic chromosomal alterations affect COVID-19 vaccine immunogenicity. Cell Genom, 5(3):doi:10.1016/j.xgen.2025.100783. 2025
18)Tanaka H, Nishimura T, et al.：Sectm1a Depletion Promotes Neutrophil Recruitment during Pneumococcal Pneumonia. Am J Respir Cell Mol Biol, 73(1)：60-72, 2025
19)Toshifumi N, Sakiko K, et al.：Subtype- and treatment-based analysis of calcium dynamics in primary aldosteronism. European J Endocrinol, accepted, 2026
20)Uwamino Y, Nishimura T, et al.：Breakthrough Infection After a Primary Series of COVID-19 Vaccination Induces Stronger Humoral Immunity and Equivalent Cellular Immunity to the Spike Protein Compared with Booster Shots . Vaccines (Basel) , 13(7) : doi:10.3390/vaccines 13070751.2025
21)Yamada-Goto N, Sei N, Murai-Takeda A, Inokuchi M, Hirose H, et al.：Longitudinal impact of weight change on blood pressure in university students. Hypertens Res, 48(11)：2938-2949, 2025

22)Yoshikawa M, Nishimura T, et al.：Oral β-lactam combinations are effective in vitro against Mycobacterium avium, regardless of clarithromycin susceptibility. Microbiol Spectr, 13(11)：doi: 10.1128/spectrum.02012-25. 2025
23)Zhang Y, Sado M, et al.：Cost-effectiveness of brexpiprazole for the treatment of major depressive disorder in Japan. J Affect Disord, 388：119532, 2025
24)井ノ口美香子：小児の成長評価指標　身長，体重，BMI，肥満度を中心として．慶應保健研究，43(1)：7-13，2025
25)井ノ口美香子：女性の低体重/低栄養　小児における痩せの現状と課題．臨床栄養，147(3)：316-320，2025
26)植田花奈，清奈帆美，後藤伸子，齋藤圭美，広瀬寛：2019-2023 年度大学生を対象とした COVID-19 パンデミック後　痩せ増加に影響した要因検討．慶應保健研究，43(1)：61-66，2025
27)小川 渉，井ノ口美香子，他：女性の低体重/低栄養症候群(FUS)ステートメント　閉経前までの成人女性における低体重や低栄養による健康課題　新たな症候群の確立について．肥満研究，31(2)：55-61，2025
28)片山奈理子：アスピレーションとレジリエンスに目を向けた認知行動療法の画像研究．精神療法，51(4)：493-494，2025
29)河津桃子，康井洋介，徳村光昭，篠原尚美，佐藤幸美子，木村奈々，山岸あや，井ノ口美香子：新型コロナウイルス感染症対策後の小学生の視力低下(第 3 報)．慶應保健研究，43(1)：39-43，2025
30)後藤伸子，外山千鈴，大山晶子，弦巻美保，松本可愛，久根木康子，齋藤圭美，武田彩乃，西村知泰，広瀬寛，他：特定健康診査および特定保健指導第1～3期の振り返り－教職員の健康向上にどう活かすかー．慶應保健研究，43(1)：33-38，2025
31)佐渡充洋：精神疾患・認知症の社会的コスト―支援と共生を設計する指標．日精診ジャーナル，51(11)：679-687，2025
32)佐渡充洋：うつ病に対する薬物療法と認知行動療法の併用における臨床的留意点を教えてください―主に薬物療法を担当する主治医の立場から．精神科治療学，40(増刊号)：86-89，2025
33)佐渡充洋：マインドフルネスとこころの健康．長崎純心大学 心理教育相談センター紀要，24：1-23，2025
34)篠原尚美：小児の頭部外傷．慶應保健研究，43(1)：73-76，2025
35)武田彩乃，中村真理，小杉将太郎：二次性高血圧と健康診断．慶應保健研究，43(1)：67-71，2025
36)田中敏章，井ノ口美香子，他：前思春期身長別の思春期成長の解析　小柄な子どもは思春期に追いついていない．日本成長学会雑誌，31(1)：3-11，2025
37)長井瑠菜，久根木康子，澁谷麻由美，松本可愛，高橋綾，大山晶子，弦巻美保，和田みどり，渡邊沙也佳，西村知泰，広瀬寛，他：B 型肝炎ワクチン基礎接種後の時間経過に伴う HBs 抗体価および HBs 抗原に対する免疫の記憶の低下：医療系学部新入生における検討．慶應保健研究，43(1)：51-59，2025
38)牧野伸司，弦巻美保：心不全パンデミック対策 Prevention of Heart Failure Pandemic．慶應保健研究，43 (1)：15-18，2025
39)真室飛翔男，葭葉茂樹，他：先天性心疾患の遺伝性についての検討．心臓，57(1)：45-53，2025
40)室屋恵子，井ノ口美香子，後藤伸子，武田彩乃，河津桃子，福富千尋，木村奈々，広瀬寛，他：中学生・高校生における月経随伴症状等の早期発見と保健指導の実践．慶應保健研究，43(1)：45-50，2025
41)康井洋介，福富千尋，室屋恵子，河津桃子，篠原尚美，井ノ口美香子：2023/2024 シーズンにインフルエンザが三峰性に流行した神奈川県内

の一中学校における疫学的検討. 慶應保健研究, 43(1) : 27-32, 2025
42)葭葉茂樹 : 学校心臓検診の歴史と今後の展望. 慶應保健研究, 43(1) : 19-25, 2025

ウ　学会発表

1)井ノ口美香子 : やせ・体重増加不良をどう診るか？　第 21 回小児内分泌入門セミナー　2025
2)井ノ口美香子 : 小児の成長評価指標　体型評価指標を中心に　第 72 回日本小児保健協会学術集会　2025
3)井ノ口美香子 : 小児・思春期のやせと肥満　第 63 回全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会研究集会　2025
4)井ノ口美香子 : 小児におけるやせの考え方と課題　第 27 回日本骨粗鬆症学会　2025
5)井ノ口美香子 : 心理面から考える肥満・やせの治療と予防　第 47 回小児成長研究会　2025
6)井ノ口美香子 : 子どものやせ対策　愛知健康の森健康科学総合センター　令和 7 年度学童期から思春期の健康づくり・生活習慣病予防研修 2025
7)井ノ口美香子 : Female Underweight/Under-nutrition Syndrome(FUS)－小児期からの予防と対策　第 23 回日本小児栄養研究会　2026
8)井口智洋, 井ノ口美香子, 他 : 乳児の便形状と便色の変化に関するビッグデータ解析　第 128 回日本小児科学会学術集会　2025
9)小澤満玲, 片山奈理子, 他 : 我が国における認知行動療法のドロップアウトの現状　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会　2025
10)片山奈理子 : 精神医学におけるポジティブ精神医学の貢献とその可能性　第 121 回日本精神神経学会学術総会　2025
11)片山奈理子 : 反芻に取り組む : その神経基盤から臨床応用まで　第 22 回日本うつ病学会総会 2025
12)後藤伸子, 他 : 高度肥満症を伴う子宮体癌/子宮内膜異型増殖症に対する術前後減量治療介入の検討　第 46 回日本肥満学会・第 43 回日本肥満症治療学会学術集会　2025
13)後藤伸子, 清奈帆美, 広瀬寛 : 新入学時の生活習慣が体格・血圧の 3 年間の変化に与える影響 : 大学生を対象とした縦断解析　第 46 回日本肥満学会・第 43 回日本肥満症治療学会学術集会 2025
14)小林由季, 片山奈理子, 他 : うつ病に対する認知行動療法と薬物療法における認知機能改善効果の比較 : 傾向スコアを用いた縦断的検討　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会　2025
15)小松未来, 片山奈理子, 他 : うつ病に対する認知行動療法による反芻思考の改善に関連する脳領域の縦断的検討　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会　2025
16)齋藤圭美, 西村知泰, 武田彩乃, 佐渡充洋, 他 : 大学における相談活動の取組みについて～女性のからだ・男性のからだ相談, SOGI 相談～　第 63 回全国大学保健管理研究集会　2025
17)佐渡充洋 : マインドフルネスの概念を取り入れたマインドフルネス認知療法の効果機序　第 47 回日本内観学会　2025
18)佐渡充洋 : マインドフルネスの観点から見たストレスとの関わり方　第 25 回日本抗加齢医学会総会　2025
19)佐渡充洋 : なぜ職域のメンタルヘルス対策は必要なのかーマインドフルネス, ウェルビーイングの視点からの考察　第 121 回日本精神神経学会学術総会　2025
20)佐渡充洋, 他 : マインドフルネス認知療法－理論と実践の両面からアプローチし, 瞑想のインストラクションも体験してみようー　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会　2025
21)佐渡充洋 : マインドフルネス認知療法に必要なスキルセット:MBI-TAC の紹介と Instruction、Inquiry のポイント　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会　2025
22)佐渡充洋 : マインドフルネス認知療法の課題

と挑戦－“研究・臨床ギャップ”と“質の担保”－　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会 2025

23)佐藤幸美子, 康井洋介, 木村奈々, 德村光昭, 井ノ口美香子：新型コロナウイルス感染症流行前後の学校感染症流行状況の変化－神奈川県の私立小学校 1 校における検討　第 71 回日本学校保健学会学術大会　2025

24)島村莉奈, 西村知泰, 他：抗菌薬投与による Mycobacterium abscessus の細胞壁脂質とコロニー形態の変化　第 99 回日本感染症学会総会・学術講演会・第 73 回日本化学療法学会学術集会合同学会　2025

25)庄司保子, 井ノ口美香子, 他：小児期・思春期発症摂食障害患者の BMI-SDS 変化率と FT3/FT4 の関連　第 57 回日本小児内分泌学会　2025

26)長尾元太, 西村知泰, 他：肺非結核性抗酸菌症　CFTR バリアントを有する日本人集団肺非結核性抗酸菌症の臨床的特徴　第 65 回日本呼吸器学会学術講演会　2025

27)中村俊一郎, 井ノ口美香子, 他：子どものやせに関する E ラーニング　学校教職員(養護教諭)における教育効果　第 43 回日本小児心身医学会学術集会　2025

28)西村知泰：内憂外患:結核に対する考えをあらためる　結核の病態を反映する宿主バイオマーカー　第 99 回日本感染症学会総会・学術講演会・第 73 回日本化学療法学会学術集会合同学会 2025

29)西村知泰：宿主免疫応答を利用した抗酸菌感染症の検査法　第 100 回日本結核・非結核性抗酸菌症学会学術講演会　2025

30)西村知泰：接触者健診の実際と課題　第 100 回日本結核・非結核性抗酸菌症学会学術講演会 2025

31)野田祥子, 片山奈理子, 他：大うつ病性障害の性格特性と認知行動療法における反芻思考改善の関連　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会　2025

32)板東央矩, 片山奈理子, 他：うつ病に対する反復経頭蓋時期刺激療法と認知行動療法の併用療法についての先行研究レビュー　第 25 回日本認知療法・認知行動療法学会　2025

33)平野泰大, 井ノ口美香子, 他：日本人小児における armspan および armspan 身長比の基準値:オランダ人およびトルコ人との比較　第 57 回日本小児内分泌学会　2025

34)三谷義英, 井ノ口美香子, 他：学校心臓検診 DX　学校健診の DX 化に向けて　第 128 回日本小児科学会学術集会　2025

35)康井洋介, 河津桃子, 木下眞里, 篠原尚美, 葭葉茂樹, 井ノ口美香子：2023/24 シーズンの中学校 2 校におけるインフルエンザ(A 型・B 型)流行状況, ワクチン有効性, 抗インフルエンザ薬処方状況　第 72 回日本小児保健協会学術集会 2025

36)康井洋介, 河津桃子, 木下眞里, 篠原尚美, 葭葉茂樹, 井ノ口美香子:児童生徒の保健管理に関する実践報告－保健室来室記録を兼ねた健康診断票および保健日誌の活用　第 71 回日本学校保健学会学術大会　2025

37)Yamada M, Sado M, et al.:Feasibility Study of Open Dialogue Training for Psychiatric Staff: A Pre-Post Study in a Single Group Design　ASIAN ACADEMY OF FAMILY THERAPY 10th Annual Conference　2025

38)吉川万衣子, 西村知泰, 他：Mycobacterium avium complex に対する β ラクタム系抗菌薬 2 剤併用の in vitro における有効性評価　第 74 回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第 72 回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会 2025

編集後記

ここに、『保健管理センター年報』をお届けいたします。本誌は、本学における大学保健、一貫教育校の保健管理業務、感染症対策、環境衛生、ならびに教育・研究活動の 1 年間の歩みと成果を網羅した記録です。ご多忙の折、原稿をお寄せいただきました執筆者の皆様、ならびに編集作業にご協力いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。2024 年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の 5 類移行後の日常が定着する一方で、インフルエンザをはじめとする従来の学校感染症の流行が目立ち、対応に追われる 1 年となりました。これを受け、本年（2025 年度）も引き続き、感染症に対する迅速な情報収集と注意喚起、さらには徹底した衛生管理業務を継続し、学内の安全な環境維持に注力してまいりました。また、近年課題となっている学生の健診受診率・結果閲覧率の低下に対しては、自身の健康への関心を高めるためのアナウンスや対策を地道に講じております。児童・生徒から学生、教職員に至るまで、身体的な健康管理はもちろんのこと、相談窓口の周知を含めたメンタルヘルス不調への多角的なアプローチも、現代の保健管理においてますます重要性を増していると強く実感させられます。

本年の大きな節目として、当校が「全国大学保健管理協会 関東甲信越地方部会」のホスト校（開催地）となり、無事に研究集会等の全日程を執り行うことができました。各大学の保健管理を担う多くの専門家が一堂に会し、大学保健の DX 化、学生・教職員の健康支援、精神保健といった共通の課題について活発な議論を交わしたことは、大変有意義な経験となりました。本大会の運営を支えてくださったスタッフの皆様の尽力と、参加された皆様のご協力に、この場を借りて深く御礼申し上げます。今後とも、時代の変化や要請に応じて保健管理センターが果たすべき役割を真摯に見つめ直し、義塾に関わるすべての皆様の健康と安全を支える存在として、教職員一同、より一層業務に邁進してまいります。本誌が皆様の健康増進や日々の活動の一助となれば幸いです。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

慶應義塾大学保健管理センター年報編集委員会
中島 清隆

年報編集委員会

編集委員長	西　村　知　泰	
編集委員主幹	井ノ口　美香子	外　山　千　鈴
	神　岡　美　穂	本　荘　直　子
	齋　藤　圭　美	中　島　清　隆
編集委員	武　田　彩　乃	牧　野　伸　司
	後　藤　伸　子	康　井　洋　介
	中　村　真　理	阿　部　さゆり
	木　村　奈　々	松　本　可　愛
	室　屋　恵　子	澁　谷　麻由美
	武　藤　志　保	高　橋　　綾
	弦　巻　美　保	鈴　木　直　実

（順不同）

慶應義塾大学保健管理センター年報　2025

2026年８月31日発行　〔非 売 品〕

発　行　人　西村　知泰
慶應義塾大学保健管理センター
〔〒223-8521〕
横浜市港北区日吉4丁目1－1
電話045-566-1055

印刷・製本　（有）梅 沢 印 刷 所